



Title	ミッシェル・フーコー再考と敷衍：文化研究の方法論について
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2011, 2010, p. 17-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77365
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ミッシェル・フーコー再考と敷衍

——文化研究の方法論について——

伊 勢 芳 夫

1. はじめに

極東国際軍事裁判（東京裁判）で、英領インドのインド人パル判事（Justice Radha Binod Pal）が、裁判官の中でただ一人被告全員に対して無罪を主張したことはよく知られている。パル判事の主張の根拠は、裁判自体の正当性に問題があるということである。判決が事後法によってなされたという非合理性と、アメリカによる日本への原爆投下等、連合国によってなされた非人道的行為を棚上げにする不公正さがあるというのだ。

確かに「近代的」な刑法の下では、法の裁きにおいて階層、人種、家柄のような被告の意思の及ばない社会的要因によってその判断が影響を受けることは許されない。判決は犯罪の内容や個人の特性によってのみ決定されるべきことは自明になっている。したがって、上記のパル判事の主張は、日本軍の戦時下における残虐な行為の犯罪性を否定することが本意ではなく、東京裁判で日本を一方向的に断罪することによって欧米列強の植民地政策の犯罪性を隠蔽する可能性を危惧してのことであろう。もし第2次世界大戦の犯罪性をいわゆる「近代的」な国際法のもとで公正な裁判をするならば、東京裁判での日本やニュールンベルク裁判でのドイツだけではなく、当然イギリスやフランスの植民地政策やアメリカの原爆投下や日系アメリカ人に対する非人道的な隔離政策等も裁かれるべきであったろう。しかしながら、戦勝国が進んで自ら被告席に立って裁かれるなどということは、考えられない。実際のところ、国家や民族によってなされた犯罪においては、今なおアンシャン・レジームの時代の判断基準から脱し得ていないのが現状であろう。

ただ、ここで問題になるのは、上記のことが「勝てば官軍」式の説明で片づけることができるだろうかということである。なぜなら、戦勝国の欺瞞についての申し立ては、パル判事だけではなくその後のポストコロニアルの研究をはじめ、数多くなされてきたにもかかわらず、日本の敗戦に対しては「是」とする評価はみじんも揺るぎなく継続している。つまり、第2次世界大戦で日本が「悪玉」であることは否定すべきでない「事実」なのである。一方、日清戦争や日露戦争では、日本を「悪玉」とする評価はほとんど聞かれない。この違いは、第2次世界大戦では日本軍による捕虜の虐待や「南京大虐殺」が行われたという証言によって生じる客観的な歴史評価なのであろうか。しかしながら、戦争において虐殺は常に起こりうることであり、日清戦争でも、「旅順虐殺事件」があったという証言が

ある。

むしろこの評価の違いは、アメリカやイギリス、つまり西欧での評価の反映ではないであろうか。つまり、まだまだ欧米の言説、特に英語圏の言説が世界を支配していることが原因であるのだ。これが故に、イラク戦争におけるアメリカの欺瞞が当時あれほど非難されたのに、年月とともに忘れ去られてきたように感じられることなどはその一例であろう。このような英語の言説の支配する世界については、エドワード・E・サイード (Edward E. Said) が *Covering Islam* でアメリカのイスラム報道の偏りを必死に訴えたが¹、彼はその際、報道する側の権益とのつながりや中東情勢に通じているとされるジャーナリストや学者の偏向や無知を暴きたてるだけで、英語言説の優位性については掘り下げようとしない。同様に、これまでのポストコロニアル研究において、特定の集団や個人を超えた、この英語言説の世界支配について真正面から議論されてきたかは、はなはだ疑問である。

確かに、20 世紀中ごろまで、非西欧地域のほとんどが西欧列強の植民地であり、脱植民地=脱西欧という図式が無理なく適用されてきた。しかしながら前述の日本の戦争に対する評価の問題、ベトナム戦争以降のアメリカの仕掛けた戦争に対する評価、原理主義者のテロリズムの問題、更にチベットや新疆ウイグル地区に対する中国の覇権主義の問題、欧米の植民地から独立した国家の独裁と人権抑圧の問題など、今日ますます先鋭化してきた諸問題を考える際、英語言説の世界認識、そしてそれをもとにした評価や判断とは別の認識や評価を提示が必要である。このことは、たとえば日本語によって英語言説を読み直すというような単純な作業を意味しているのではない。閉鎖的な日本語言説のなかに英語言説を取り込む試みは、明治以来日本の欧化主義の知識人によって試みられてきたことであるが、それは絶大な力をもつ英語言説に対するドン・キホーテ的な試みであるばかりではなく、ポストコロニアル状況の世界にあってほとんど意義のない作業である。そうではなく、現在絶対的優位性をもつ英語言説を相対化することにより、他の言説が入り込む空間を生み出す作業である。そのためには、必然的に日本語言説も相対化されなければならない。つまり、「主体」と「他者」の位置の連続した切り替えを行うのである。いわば、アインシュタイン的相対化である。

そのような作業によってみえてくるのは、単なる西洋対東洋という図式ではないであろう。もちろん、繰り返しになるが、現在でも西欧の影響力は大きく、その言説は非西欧地域の政治、社会制度、文化、そしてその根底にある世界観や価値基準に対する支配力を保持している。しかしながら、重要なのは、どのような要因が、ある者を中心の位置につけ、また別の者を周縁に追いやるのかを見極めることである。そのためには、中心 X 周縁 Y というようにそれぞれの項を変数に置き換えることから出発する必要がある。

サイードは、西洋×東洋という固定的な図式で世界史・文学史を読み直し、それまでの西欧中心的な歴史観では隠ぺいされている部分を明らかにした点で大きな功績があったの

¹ Edward W. Said, *Covering Islam* (London: Vintage Books, 1997)を参照。

だが、西欧諸国が他の地域を圧倒する経済、軍事、外交、そして言説の優位性を獲得していった原動力を逆に隠蔽してしまった。しかしながら彼が理論的に依拠した一人であるミッシェル・フーコー (Michel Foucault) は、彼の「知の考古学」的方法論において、そのような固定化した関係性をもとに論を展開してはいない。いや、むしろそのような固定的な関係性を常にずらすことによって、考古学的な読み直しに成功しているのだといえる。本論では、フーコーに立ち返って、分析の方法論を再考し、さらにポストコロニアル研究のために敷衍する必要があると考える。²

2. 言説形成＝編成について

本論においては、フーコーの個々の概念——権力やイデオロギー等——を問題にするのではなく、彼の知の考古学的研究の手法に焦点を置きたい。なぜなら、権力やイデオロギーにしても、知の地層から生まれてくるものであり、ある社会・ある時代の知の地層を再現することが重要であり、その再現の過程で内在する諸要因の質と強度がみえてくると思えるからだ。

フーコーは、『狂気の歴史』(1972)において、「狂気」に関する知——あるいは、共通認識——の変遷を、フランスを中心としたヨーロッパの論文、文学作品、記録文書、書簡、日記、帳簿、絵画等からそれに関わる記録を数多く収集し、通時的、及び共時的な影響関係を調査している。それによってみえてくる「狂気」に関する言説形成＝編成は、過去の言説の継続、衰微、あるいは復活の過程と、同時代のいくつかの領域の言説の影響、対立、もしくは併存関係により、大きな「狂気」言説の形成＝編成が推移し、個々の現われ（言表行為）——つまり、パロール——を生み出していく。その現れとは、文字として著作や書簡等の中に現れる場合もあるし、絵画の中や、「狂気」の認定方法、「狂人」に対する処置の在り方、臨床医の治療方法、学問的研究の中身に現れるのである。そこでみえてくるのは、時間軸に沿って狂気に対する偏見が紆余曲折を経て是正されていくような楽観主義的進化論ではなく、キリスト教における「狂気」の位置、倫理的な善悪の境界の線引、したがって「狂人」への待遇の在り方、哲学的な理性と非理性の問題、臨床的な治療方法、学問的な「狂気」の定義の内容に動揺を与え、変化を促すか、あるいは反動的な態度を生み出す。それは単に既成の言説にのみ影響を与えるのではなく、「狂気」の学問的な認識の変容が、新たな言説——心理学や精神分析——を生み出していくのである。

フーコーは、その言説形成＝編成を再現する作業に際して、大きな言説を構成する下位の言説のいずれに対しても等距離に記述しようと努める。そのことによって、それぞれの下位の言説の影響・反発・乖離の関係がみえてくるのである。一方、サイードの『オリエ

² 本論では、ミッシェル・フーコーの『知の考古学』（中村雄二郎訳、河出書房新社）、『狂気の歴史』（田村俣訳、新潮社）、『監獄の誕生』（田村俣訳、新潮社）、『言葉と物』（渡辺一民・佐々木明訳、新潮社）に依拠している。

ンタリズム』においては³、下位の言説の共犯関係をことさら強調するので、反発や乖離の側面がみえてこない。そのために「西洋」の白人優位主義が際立って現れてくるのであるが、固定的な図式になってしまっている面は否めない。つまり、『オリエンタリズム』そのものが政治的に偏りのある研究ともいえるのである。

フーコーの言説形成＝編成の考古学的方法論は、個々の言表行為（パロール）——言語、行動、判断等——を発する場としてのエージェント（個人）を特に問題にしていないが、人はその言動が時間軸によってのみ支配されるのではなく、同じ時間に生きる複数の人間は、その時代の複数の言説支配のどこに位置するかによって、その言動に差異が生じるのである。例えば、コペルニクスがキリスト教の言説にのみ影響されていた場合と、近代的な天文学の言説の影響をも受けていた場合、そして彼が在野にあって近代的な天文学の言説のみに影響を受けた場合とでは、彼の言動がまったく同じであったとは考えられないのである。

このような点は、ポストコロニアル研究においては、さらに重要な意味を持ってくる。それは単に支配者か被支配者のいずれの位置にいるかというだけではなく、それぞれのなかでも、どこに立ち位置を求めるかによって、様々にヴァリエーションのある言説支配を受けることによって、その言動に違いが生まれてくるのである。

3. 近代化の歴史

19 世紀から 20 世紀中葉にかけての欧米列強による植民地政策、そしてその政策を生み出し、方向付けを行い、その前提としての「オリエン特」像を描き、そして軍事、経済、教育、学問行動を行わせた言説、及びその形成＝編成過程を再現するにあたって、最も重要な言説は何であろうか。植民地化を推し進めるにあたり、港湾を整備し、地理学的調査を行い、先住民の習慣を調査し、橋を架け、鉄道を敷設し、西欧の法律をはじめ様々な社会制度を移入し、学校を作り先住民を教育する政策を実施したのは、いったいどのような言説が植民地支配者をしてその方向に仕向けたのであろうか。人種的偏見であろうか、それとも経済的貪欲さからであろうか。もちろんそのような言説を否定することはできないのだが、しかしそれだけでは、イギリスによるインドの植民地政策を説明することはできないであろう。単なる先住民から略奪し彼らを殺戮する衝動以外の、別の力が働いていると考えられるのである。その別の要因がはっきりみえてくるのが、英仏を見習って、台湾のインフラを整え、台北を近代都市にし、教育制度や社会制度を移植した日本であろう。台湾が日本に割譲された後、日本は台湾の植民地化に多くの精力を傾注したのであった。それは、まさに日本が近代的な国家になったことを西欧諸国に示すためである。このことからわかるように、19 世紀の植民地政策において、その方向性を生み出していったのが「近代化」の言説形成＝編成であった。このように、「近代化」という化学反応が西欧で最初に

³ Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979)を参照。

発火し、18 世紀から 19 世紀にかけて爆発的に燃焼し、その炎が瞬く間に世界を飲み込む中で、日本という極東の国に引火すると、新たな化学反応を誘発した。それは短期間で爆発的な化学反応を起こした。その後 20 世紀の後半からは、それまで不活性な地域からも、第 3、第 4、第 5 の反応が起こっていったのである。

「近代化」の言説形成＝編成こそ、文明の光をもたらす使命をヨーロッパの人間に自負せしめ、人種的ヒエラルキーを客観的事実として信じこませ、植民地獲得に血眼にさせ、植民地政策を推し進め、西欧の言語や学問を卓越したものとして植民地住民に教えさせる主たる原動力だったといえる。つまり、近代化の歴史、あるいは近代化という現象において生じた言説形成＝編成を考古学的に研究してゆくとき、19 世紀から 20 世紀中葉にかけての欧米列強や日本の植民地主義の歴史を、そしてその後のポストコロニアル状況を知(認識)の地層として再現できるのではないかと考える。

4. メタ言語、もしくは方法論⁴

文学・文化研究において、政治性・イデオロギー性を放置することが、対象の固定化・図式化につながることは既に言及した。それはまた、新たな言説形成＝編成に取り込まれる危険性もある。そのために、フーコー流の言説形成＝編成を考古学的に知識化していく方法が有益であることを述べた。しかしながら、フーコーの実践においては、ヨーロッパの社会での言説形成＝編成を再現することであった。一方、19 世紀、20 世紀の西欧列強による非西欧地域の植民地化(近代化)の言説形成＝編成にあつては、まったく異なった言説形成＝編成の歴史を持つ社会の取り込みが起こったのであり、フーコーの方法をさらに敷衍する必要があるだろう。

そもそも伝統的な文化研究においては、「単数の文化(Culture)」観が信奉されており、色々な言語で書かれていようとも、(西洋)文化に内在する価値観は普遍的であるというのが前提とされていた。しかしながら、「複数の文化(cultures)」観に基づく文化研究においては、言語と価値観の結び付きが重要になると考えられる。しかしながら、根本的で最も重要な問題でありながら、きわめて対応が厄介なことから、通常は不問に付される、あるいは中途半端な対応しかなされてこなかった問題は、「価値(善悪)の源泉」とでも表現できる文化の中核にあるメカニズムの研究である。ある社会において、何が「善(是)」と判定され、何が「悪(非)」と判定されるかというメカニズムそのもの研究である⁵。もちろん、ある特定の時代のある特定の社会で、何が善で何が悪とされてきたかの文化的な研究は、枚挙にいとまがないほど生産されてきている。しかしながら、その善悪を生み出すメカニズム

⁴ 拙論「文化研究のメタ言語——脱政治的記述の可能性」(『ポストコロニアル・フォーメーションズⅡ』、言語文化研究科、2007) から一部抜粋している。

⁵ 本論で「善」と「悪」として指し示す意味内容は、狭義の宗教的・道徳的なものだけに限定されるのではなく、ある社会で、是認されるものと否認されるものすべてを含んでいる。

自体の研究については、意識的にも、無意識的にも、ほとんどすべての研究者が回避してきたように思われるのだ。

ポストコロニアル研究においても同様のことがいえる。「西洋」と「東洋」、「白人」と「非白人」とを分ける限りにおいて、その両者の力関係は、「白人優位」、「対等」、あるいは、「非白人優位」の3通りの関係性がありえるのである。そして、周知のごとく、19世紀は「白人優位」のイデオロギーが世界中に浸透し、ほとんど完璧なまでのヘゲモニーが確立されたのであった。ただこれにしても、人類の長い歴史のなかで眺めるとき、それはごく短期間の現象でしかない。たとえば、唐の時代の中国人で、「白人」が自分たちよりも優れた人種などと考えた者などあったとは到底考えられないであろう。当の白人にしても、18世紀初頭までと、19世紀とでは、「非白人」に対する見方には相当の隔たりがあったことは、残された資料を比較すれば明白である。ではなぜに、19世紀から20世紀中葉まであれほどの「白人優位」のイデオロギーが世界を席卷したのであるだろうか。また、20世紀になって、どうして、その対抗勢力としての民族主義的なイデオロギーが力を増し、「白人優位」の言説を弱めていくことになったのであるだろうか。人種差別が「悪」であるというイデオロギーが、「非白人」だけではなく、「白人」のなかにも広まっていった原因はなぜなのだろうか。それに対して、ほとんどすべての人は、「それは、人種差別は本質的に悪であるからだ」と当然のごとく言うであろう。しかし、それが「悪」であると決めたのは何かというと、社会（人）に他ならない。そして、かつての強烈な「白人優位」を容認・支持していたのも、社会（人）である。そして、社会（人）が善悪、是非を決定する以上、それらはあくまでも恣意的なものでしかない。ある社会に通用する善悪の基準が、別の社会では逆転することもあり得るのである。まさにそれこそが、ここで問題にしている「価値の源泉」として文化の中核にあると思われるメカニズムなのである。

複数の文化を扱う文化研究においては、その「価値の源泉」である文化の核にあるメカニズムをみつけ出し、分析し、記述することが必要になる。そのためには、まず、研究者自体が、ある特定のイデオロギーに汚染されておらず、先入観のない「目」でもって対象を観察し、そして、なんら特定の価値判断を生み出さない言語（メタ言語）を使用して対象を記述する必要があるだろう。しかしながら、サイードも『オリエンタリズム』の序論で強調するように⁶、研究者はいかに客観的であろうとしても、その研究が何らかの意味で政治的であることから逃れることはできないのである。また、いかなる言語といえども、文化の一部であり、その媒体であるわけだから、無色透明であることはなく、何らかのイデオロギー性を帯びている。しかし、われわれ自身の政治性を完全に払拭しえないまでも、それが研究に影響を与えないまでに弱めることは不可能ではないであろう。その方法は、複数の文化（言説）の中核にあるそれぞれの「価値の源泉」を並置して記述することにより、それぞれが相対化され、それらのイデオロギー性を中和させることである。

⁶ *Orientalism*, pp. 9-15.

5. 複数の言説形成＝編成について⁷

「世界」は物質的な広がりではなく、言語と、そして非言語的な、しかし記号化されたイメージのネットワークであるとするのなら、その境界は、われわれの認識が及ぶ範囲となるであろう。したがって、物理的空間と認識された空間とは別のものであるが、日本の江戸時代のような社会においては、通常、その2つの空間が乖離せず、矛盾せず共存している。そしてそのような社会にあつては、クリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）のいうように、その文化コードは社会に網の目のようにはりめぐらされ、それがコード体系、つまり日常的な文化空間を形成していた⁸。そして死や、人間の起源といった非日常的な事柄に対しては、宗教がその領域をイメージやシンボルで埋めていたのである。しかも、江戸時代の厳格な鎖国政策の日本やダライラマが実権をもっていたころのチベットの海拔3,700メートルにあるラサのような社会においては、共同体の外に「視線」をやることができず、それに慣れてしまった人間にとって、その人為的な境界は、眼にみえないものになってしまっていたのである。そしてそもそも、交通・情報技術が未成熟な社会において、その構成員である人間の持つ認識的広がりが、自然発生的に形成される社会の文化的広がりを凌駕するなどということは、きわめて考えにくいことである。したがって、その完結した日常的・非日常的文化空間のなかで、「閉ざされた」社会の人々は安定した生活を営んでいたのであった。

しかし、たとえ江戸時代の日本のように強固に閉ざされた文化空間であっても、物質的世界や、他の文化世界からの介入が全然ないわけではなかった。そしてその介入を契機にして、安定した文化空間に生きていた人々が、その境界内であろうと、境界外であろうと、介入によって生じた空隙や不可解を直観するとき、不安が生じ何とかそれを説明しようと努力するのである⁹。社会というものは、自然や異文化からの介入があれば、言語化し、意味を与え、説明することで、異物を文化空間に取り込むことによって、社会の構成員の間に広がる不安を解消するか、忍耐可能なまでに弱めたのである。もっともその文化的説明は、その本質的特性と関係があるかどうかはまったく問題ではない。旱魃が続けば、それを「神の怒り」として説明し、怒りを和らげる儀式が執り行われる。また周辺地域に脅威

⁷ 拙論「言語による「他者化」——英語と日本語の言語空間における植民地主義イデオロギー」（『言語文化研究』28号、大阪大学、2002）から一部抜粋している。

⁸ Clifford Geertz は、*The Interpretation of Cultures* (Basic Books, A Member of the Perseus Books Group, 1973)の111ページにおいて、日常生活的世界を、“The world of everyday life, itself, of course, a cultural product, for it is framed in terms of the symbolic conceptions of ‘stubborn fact’ handed down from generation to generation, is the established scene and given object of our actions.”と記している。

⁹ ギアツは、『文化の解釈学』の100ページにおいて、“Any chronic failure of one’s explanatory apparatus, the complex of received culture patterns (common sense, science, philosophical speculation, myth) one has for mapping the empirical world, to explain things which cry out for explanation tends to lead to a deep disquiet—a tendency rather more widespread and a disquiet rather deeper than we have sometimes supposed since the pseudoscience view of religious belief was, quite rightfully, deposed.”と記している。

を与える異文化社会が存在すれば、その住民を「夷狄」や「野蛮人」や「異教徒」として他者化する。そのように、文化コードは宇宙全体に普遍的に適用できるものではなく、1つの社会の文化空間、あるいは共同体にのみ通用し、意味を生み出すものである。したがって、外的介入が急激で大規模なため対処不可能な場合は、その社会は激しく動揺をきたすか、混沌の状態に陥ってしまう。時には再編成を余儀なくされるか、大きな波に飲み込まれてしまうか、そのまま瓦解してしまうことになる。ヨーロッパ近代以前においては、世界には多くの独立した文化共同体が存在していた。それらの文化空間の壁を突き崩したのは、近代帝国主義という一種の「グローバリゼーション」であった。それは、周縁の文化圏を根底から解体しながら飲み込ませることによって、一部の国々を膨張させた。もちろん膨張していったのは欧米列強であり、飲み込まれていったのは「その他」、つまりサイドのいうところの「オリエン特」であった。

周辺地域を飲み込む過程で、植民地開拓者は、ロビンソン・クルーソーがやったように、獲得した物理的空間を、認識された空間に変換しなくてはならない。さもなければ、その空間は何ら意味を産み出さない「文化的荒地」にしか過ぎないのである。そして、もし植民地化した空間に先住民が存在する場合は——ほとんどの場合はそうなのだが——、彼らとの力関係および彼らの有用性によって、ある場合には、彼らを排除し、そこに植民者と自分たちの文化を嵌め込むことで完全に乗っ取ってしまうこともあるだろうし、また、もし乗っ取ることができないほどその場所の先住民と文化が広く深く根を張っているのであれば、彼らの文化空間を自分たちの言語で読み解き、そして読み取ったものをそこに投射することによって隠蔽したり無化することになるだろう。自分たちの言語でもって異文化空間を再言語化するのである。その際、その仕事を請け負うオリエンタリストが善意の人であるか悪意の人であるかは、重要なことではあるものの、二義的なものに過ぎない。また、植民者・被植民者が、白人・黒人・黄色人種といった、特定の人種であるかどうかとも二義的なことである。最も重要で、本質的なことは、西欧列強によりもたらされた「近代化」という大きな言説形成＝編成の大渦のなかで、「前近代社会」の文化の知識化、言語化が進行し、常に、植民者・被植民者＝主体・客体(他者)の等式に収束されてしまうことである。そしてその等式を担保する必要条件は、経済力と軍事力なのである。

6. 認識の問題について¹⁰

上述のように、圧倒的な軍事・経済システムを持つようになった西欧諸国の文化ヘゲモニーの下で、非西欧諸地域が周縁化されたのは事実であるが、圧倒的優位に立つ国や民族が世界を「中心」と「周縁」に分ける認識的試みは、決して西欧の独創ではない。伝統的な中国の「中華思想」においても、中国以外の地域を周縁化し、地政学的位置関係を文化のヒエ

¹⁰ 拙論「「東」と「西」——文化相対主義と普遍主義(1)」(『カルチュラル・スタディーズの理論と実践 III——帝国の文化とポストコロニアル文学』、言語文化研究科、2003)から一部抜粋している。

ラルキーに投影して、「文明」と「野蛮」というスペクトルに配置するという世界認識は存在した。したがって、「中心」と「周縁」という意識は、人間にとって「普遍」的に存在するといえるが、一方、「近代化」という言説形成＝編成においては、その「他者」認識の方法は他の地域でのそれとは異なる要素が存在することも見過ごすことはできない。したがって、まず最初にこの「中心」と「周縁」という二項対立的世界観の「普遍」的側面を踏まえてから、「近代化」の言説形成＝編成における特殊性を考察することが必要である。

人類は、事象を把握するのに、生得的な認識手段である、諸要素の位置関係によって類別するパターン認識以外に、認識対象を可能な限り細かく分解する分析による認識か、あるいは、認識対象に対して対立項を立てて、その対比によって意味付けする二項対立的認識を行う。分析的認識は、科学における中心的な認識手段であるが、これは特に 19 世紀になって強く意識されることになった。その 1 つの例として、フランスの病理学者、ザビエル・ビシャール（Xavier Bichat）の言葉（1801 年）を挙げる。

When we study a function, we must consider the complicated organ which performs it in a general way, but if we would be instructed in the properties and life of that organ, we must absolutely resolve it into its constituent parts. So, too, if we are satisfied with general ideas in anatomy, we must examine every organ en masse, but it is imperiously necessary to separate their tissues one by one, if we purpose to go into a minute analysis of their intimate structure.¹¹

これは人体を認識する方法を説いた箇所であるが、このなかには基本認識として、人体のような複雑で捕らえがたいものであっても、構成要素に分解することによって理解することができるという考え方がみてとれる。このように、19 世紀になると、科学的認識方法によって世界は解明できるという信念が西欧に広がっていくのである。そしてこの分析的認識を突き詰めていけば、物質を可能な限り分解していき、最小の粒子を突き止め、その結果として、この世界に存在するものはすべて基本単位から構成される様々な集積体とみる。しかしこの認識方法だと、「ヒト」と「サル」の差は、カラダを構成するいくつかの原子の成分比まで集約してしまう。また、昨今、その発展が目覚ましい遺伝子学においても、両者の遺伝情報の違いはきわめて小さいことが分かってきている。しかし現実には、いかなる人間の社会においても、「ヒト」と「サル」の差は、単なる肉体の形状の違いをはるかに超えて、歴然と判別されている。これはまさに、人間の一般的で伝統的な認識方法、つまり、二項対立的認識方法によって差異が拡大されるからである。二項対立的認識方法では、たとえば 99 パーセントが類似していても、それらは無視され、1 パーセントの差異が問題にされる。いや、それどころか、きわめて主観的な要素が付加され、それが「本質的な」差異として登録されてしまう。したがって、差異は無限に増殖されていくのである。分析的認識に

¹¹ *Literature and Science in the Nineteenth Century: An Anthology* ed. Laura Otis (Oxford University Press, 2002), p. 152.

よれば、「ヒト」は、生物学的にはむしろ個体間の差異は捨象され、共通項に収束されていくのであるが、二項対立的認識においては、様々に細分化されていくのである。そのなかでも、人種間、ジェンダー間、そして社会階層間の差異ほど、人類の歴史を通じて増殖してきたものはないであろう。生物学的見地からすれば、肌の色の差異などきわめて微細なものでしかないが、前述したように、それがあたかも種の違いにまで拡大されるに至った時代もある。さらに、識別不可能な階層間や人種間においてさえ、二項対立的認識によって、その差異は容赦なく増殖される。その典型的な例は、ユダヤ人に対する差別や、同和問題であろう。

ここで注目すべき点は、二項対立的認識のもつ拡散性と科学的（分析的）認識のもつ収束性との関係は、後者が前者を制御しその増殖を抑制するというよりは、変容させていく働きとして機能することである。そしてこの科学的認識の触媒作用こそが、「近代化」の言説形成＝編成の特殊性なのである。

7. 言説形成＝編成の単位について¹²

社会というものがベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson)のいう意味で「想像の共同体」であるとしても、共同体意識が客観的事実として形成されていなければ、ある地理的な空間に生物学的に誕生したヒトの群れが集団として団結するほどの同質のアイデンティティを共有することはあり得ないであろう。ある社会において言説形成＝編成が進行し、それが社会の構成員によって共有されるためには、流通可能な「単位」の存在が不可欠になる。そのような「単位」なくしては、社会全体に拡散し伝承されることはないのである。そしてその基本単位はコード化された記号である。そもそも、人間が認識し、表象し、伝達できるためにはコード化が必要である。コード化されていないということは、存在しないということと等価である。紫外線や放射線のことを考えてみればそのことは明白であろう。それらは宇宙の誕生以来「常に」存在しているのであるが、ヒトにとっては、それらがコード化されるようになって初めて「存在」したのである。それと同様に、ヒトが、社会、文化を読み解くためには、それに先立ってコード化がなされる必要がある。さもないと、ヒトにとって「無」であるのだ。

社会という水槽に、コードが沈殿し、それらは複雑に絡み合い、様々な結晶を生み出していく。そして人間は、長い歴史の間に生成し、変化し、細分化してきた文化のコード体系をもった社会に生まれ、幼少期から、家庭や、学校、生活・政治共同体、宗教施設のなかで、コード化された記号を媒体としてその社会が承認した認識や価値観が刷り込まれていく。もちろん同一社会といえども、内部に様々なヴァリエーションを内包しており、地域や、世代、社会階層で必ずしも同じコードが用いられるとは限らない。しかしながら、それらの内部における差異や変化は重要であるものの、さらに重要なことは、社会を構成

¹² 拙論「『反抗者』の肖像——表象のメカニズムの理論的スケッチ」（『ポストコロニアル・フ

する成員の一人一人はその文化的コード体系の複雑な網目にかんじがらめに縛られており、コードに対して疑義を感じる余地がきわめて少ないということである。あたかも、それらは自明、真実のものであり、それを疑うことを、許しがたい誤り・冒瀆のように感じる精神構造が作り出されていることである。だから、たとえば、キリスト教の教義にどっぷり浸かった16世紀のイタリアにおいて、天が地の周りを回るのはではなく、地が天の周りを回ると主張する人間に対しては、火炙りにするのが当然であるという感情を生じせしめるのである。

8. 終わりに

以上のように、19世紀から20世紀の中葉にかけての帝国主義の時代において、「近代化」の言説形成＝編成が、欧米列強が植民地支配をするなかで、軍事行動、政策、情報、認識、価値観、学問の様々な分野において、その個々の現れをつくりだしていき、また、非西洋の人びとにとっては、その「近代化」の言説形成＝編成の大渦の中に自らの社会が取り込まれていくとともに、その社会固有の言説形成＝編成がその過程で大きく変貌させられていったのであった。そして、本論において、その絡み合う複数の言説形成＝編成を理論的に検討し、その考古学的再現の方法の説明を試みた。もちろん、この方法の正当性を実証するためには、ミッシェル・フーコーの実践のように、個々の現れとしての歴史資料を収集し、言説形成＝編成を実際に再現する必要がある。

オーメーションズ』、言語文化研究科、2006）から一部抜粋している。